平成２０年度「高等学校における発達障害支援モデル事業」報告書（中間・最終）

都道府県名	愛知県
学校名	県立衣台高等学校
学校所在地	豊田市太平町平山５
研究期間	平成２０～２１年度

Ⅰ　概要

1　研究課題

すべての生徒への積極的なサポート体制の構築に向けて、発達障害の可能性のある生徒への支援を念頭に研究する。

2　研究の概要

①研究委員会の設置…実践研究を行うに当たっての企画・調整・連絡等を行う研究委員会を校内に設置する。
②特別支援教育に関する校内委員会の設置及び特別支援教育コーディネーターの指名…該当者には、県総合教育センターの特別支援教育講座で研修を受けさせる。
③現職研修の充実と情報の収集…全職員参加の現職研修を年間数回実施するとともに、研究委員会委員を対象とする事例研究会を実施する。
④保護者や地域との連携を図るための情報提供…地域の公民館と連携して年間数回にわたる講演会を実施し、発達障害のある生徒に対する理解を深める啓発活動を行う。

3　研究成果の概要

①研究委員会の設置…実践研究を行うに当たり、研究委員会を設置し、年間３回開催した。研究委員会の指導助言を日本赤十字豊田看護大学教授と桜花学園大学准教授に依頼した。研究委員会では全職員対象にした研修会、生徒へのアンケート調査・啓発活動の企画・立案を行った。
②特別支援教育に関する校内委員会の設置及び特別支援教育コーディネーターの指名…指名された特別支援教育コーディネーターは、県総合教育センターの特別支援教育講座を受講し、本年度設置した特別支援教育に関する校内委員会のあり方を考察した。
③現職研修の充実と情報の収集…全職員参加の現職研修を７回実施し、特別支援教育に関する理解を深めた。また、生徒への啓発活動として、１、２年生全員を対象に映画「音符と昆布」を上映したり、発達障害に関する講演会を実施したりして、障害についての意識づけを行った。
④保護者や地域との連携を図るための情報提供…「発達障害のある生徒の青年期問題への支援」というテーマでシンポジウムを開催した。名古屋経済大学教授による基調講演ののち、シンポジストらによる問題提起、総合討論を実施した。保護者や地域の方々のみならず県内の教職員や県外からも多数の参加者を得た。

Ⅱ　詳細報告

1　研究の内容

(1) 発達障害のある生徒に対する指導方針

ア　生徒の実態（把握方法も含めて）

生徒の状況を把握するため、報告カードや保健アンケート等を用いて、全職員で生徒の傾向の把握と情報の収集を行った。その結果、様子や行動が気になる生徒や発達障害と疑われる生徒を把握することができ、研究委員会で報告した。その後、これらの生徒について、授業担当者や学級担任から聞き取り調査を行い、詳しい情報を集め、個別の指導計画案を策定した。

イ　指導方針

すべての生徒への積極的なサポート体制の構築に向けて、発達障害の可能性のある生徒への支援を念頭に研究をすすめた。

ウ　成果と課題

平素はあまり気にかけていなかった生徒に対しても、声掛けを行うなど、注意を払うようになった。しかし、アンケートの項目や情報の処理の仕方が十分であったとはいえず、心理検査の内容を検討していく必要がある。

今後は、個別の支援計画の作成等について、全職員で担任を支援する学級支援体制づくりが求められる。

(2) 発達障害のある生徒に対する授業やテストにおける評価方法等の工夫

ア　授業の際の配慮事項等

全職員を対象とした職員研修会でＬＤの疑似体験を行ったことにより、日常の授業において、生徒への発問の仕方や板書の書き方を分かりやすくする工夫が大切であることが分かった。また、机間指導やノート点検を丁寧に行うことによって、個別の支援を必要とする生徒への指導の手がかりを見つけることができた。

イ　テストにおける配慮事項等

テスト問題の記述形式を分かりやすくするなどの工夫が必要であると思われる。

ウ　評価における配慮事項等

観点別評価を取り入れ、さまざまな方法で評価している。指導と評価は一体であるため、一様な形式をとることは難しいが、指導において工夫した点が活かされる評価のあり方を今後も検討していきたい。

エ　成果と課題

発達障害の疑いのある生徒にとって分かりやすい授業を目指すことは、すべての生徒にとって効果があることが教員の共通理解となった。しかし、分かりやすい授業を目指すことで、学習進度の遅れにつながるおそれがあることなどの問題も残る。

(3)発達障害のある生徒に対する就労支援

ア 支援の方策と内容

発達障害のある生徒が職場に円滑に適応することができるよう、仕事に適応する（作業能率を上げる、作業のミスを減らす）ための支援、人間関係や職場でのコミュニケーションを改善するための支援などを検討する。

イ 成果と課題

あらかじめ対応マニュアルの策定を行う必要がある。

(4)一般の生徒に対する理解推進等の指導の在り方

ア 指導の工夫と取組

生徒への啓発活動として、発達障害を理解をせるために映画「音符と昆布」を上映した。さらに、１、２年生全員に発達障害の「自閉症スペクトラム」についての理解を深めさせるための講演会を桜花学園大学准教授によって実施した。

イ 成果と課題

映画や講演会実施後のアンケート結果によると、ほとんどの生徒が発達障害についての理解を深めることができた。今後も継続して実施することで、より認識が深まるものと思われる。

(5)教職員や保護者の研修等

ア 研修会開催の回数・時期・研修内容等

(ｱ) 全職員に対して計７回（発達障害全般について４回、中学校のスクールカウンセラーの現場について１回、青年期の発達障害について１回、発達障害の子どもたちの臨床の現場について１回）の連続研修会を実施した。詳細は次のとおりである。

・「発達障害全般について」

講師　日本赤十字豊田看護大学教授(医学博士)

「アスペルガー症候群について」、「ＡＤＨＤについて」、「ＬＤについて」、「発達障害に効く薬について」の４回

・「発達障害の子どもたち　－中学校の現場から－」

講師　衣台高等学校スクールカウンセラー

中学校の特別支援教育の現状と具体的事例をもとにした中学時代に抱える課題について

・「発達障害のこどもたち　臨床の現場から」

講師　名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター軽度発達障害における治療教育的支援事業特任研究員

司法の観点からみた発達障害のある子ども、非行化した事例に共通する特徴、異性への関心、思春期の性等について

・「高等学校における特別支援教育に求められるもの」

講師　桜花学園大学准教授

「気になる」「指導しにくい」等のちょっとしたサインに気づくことや担任一人で抱え込まず、学校全体で取り組む姿勢の大切さ、問題となる行動を特定するアセスメントの重要性等について

(ｲ) 地域の小、中、高等学校、保護者等への啓発活動と地域との連携を深めるために「発達障害のある青年期問題への支援」というテーマでシンポジウムを開催した。名古屋経済大学教授、桜花学園大学准教授、名古屋市立中学校教諭をシンポジストとした。

まず、名古屋経済大学教授から、「発達障害のある青年期生徒への支援－高等学校における発達障害支援モデル事業」をテーマに基調講演が行われた。

続いて、愛知教育大学講師の司会進行のもと、桜花学園大学准教授から「発達障害のある生徒の青年期問題－課題と予防」、名古屋市立中学校教諭から「中学校における支援について」の問題提起がなされた。

その後、３人のシンポジストにより総合討論が行われた。会場からも質問がいくつか出され、活発なシンポジウムとなった。

イ 成果と課題

研修前の教職員への発達障害についてのアンケート調査によると、アスペルガー症候群、ＡＤＨＤ、ＬＤについては約半数が名前は知っていると答えているが、その内容についての知識は不十分であることが分かった。

研修会後のアンケートではアスペルガー症候群、ＡＤＨＤについては、約65％が分かったと答え、ＬＤについては全員が分かったと答えた。このことから、研修会前は意識は高いとは言えなかったが、研修後は理解が深まり、意識も高まった。研修会によって発達障害についての知識を深めることができた。同時に、適切な支援を行う際に、いかに保護者の理解を得るかが重要なことも分かった。また、発達障害を抱えた本人や保護者が周りから理解を得られず、他人に対して抱く不信感をどう取り除くか等の問題があることが分かった。

シンポジウムは、保護者や地域の方々のみならず県内の教職員や県外からも多数の参加者を得、アンケートではほとんどの参加者が「満足した」と回答していた。ただし、本校の実践を聞きたかったとの意見も多く、次年度の課題として残った。

２ 研究の方法

(1)研究委員会の設置

ア 構成

NO	所 属 ・ 職 名	備 考
1	愛知県立衣台高等学校・校長	委員長
2	愛知県立衣台高等学校・教頭	副委員長
3	愛知県立衣台高等学校・教務主任	
4	愛知県立衣台高等学校・生徒指導部長	
5	愛知県立衣台高等学校・保健主事	事務局・渉外

6	愛知県立衣台高等学校・1年主任	
7	愛知県立衣台高等学校・2年主任	
8	愛知県立衣台高等学校・3年主任	
9	愛知県立衣台高等学校・養護教諭	事務局・会計
10	愛知県立衣台高等学校・1年担任・特別支援教育ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ	事務局・庶務

イ 委員会開催回数・検討内容

本年度は３回開催した。その内容は以下のとおりである。

(ｱ) 企画・立案検討

実践研究の企画、調整、連絡等及び事例検討会を行う研究委員会を校内に設置した。研究委員会では、シンポジウムや講演会、研修会等の企画・立案を行った。

(ｲ) 事例の検討

保健アンケートや気になるカードによって調査したうえで、特別な支援を必要とする生徒の事例を検討した。

ウ 特別支援教育コーディネーターの指名や個別の教育支援計画の策定等具体的な方策

特別支援教育コーディネーターを指名し、愛知県教育委員会が主催する特別支援教育コーディネーター養成講座を受講させた。また、事例の検討にあがった生徒の個別の教育支援計画を立て、本年度の課題と次年度に向けての方向性を検討した。

エ 成果と課題

学期に１回しか開催できなかった。次年度はあらかじめ回数やその内容を決めておく必要があり、定期的に開催するためには、定例の職員会議のような位置づけも必要である。

(2) 専門家チームの活用

ア 構成

NO	所　属　・　職　名	備　　考
1	桜花学園大学・准教授	専門行動療法士
2	日本赤十字豊田看護大学・教授	医学博士
3	スクールカウンセラー	臨床心理士

イ 専門家チームの活用状況

専門家チームは、連続研修会などの講師として、教職員、生徒らが発達障害についての理解を深めるために大きく寄与した。また、桜花学園大学准教授からは事業計画の企画に協力いただいたり、発達障害と疑われる生徒の個別の指導計画案の策定で助言を受けた。

ウ 成果と課題

今後は、専門家を個別の支援を必要とする生徒への具体的な指導の場面で活用できるように工夫していきたい。

(3) 関係機関との連携

ア 他の高等学校や特別支援学校との連携

近隣の愛知県立三好養護学校支援部に在職する職員を研究委員会のオブザーバーとして計画をすすめた。また、関係機関の専門家を紹介してもらうなど、特別支援学校等との連携を図った。

イ 発達障害者支援センターやハローワーク等関係機関との連携

本年度は、特に連携を図ることはなかった。次年度以降は連携をしながら研究を推進していく。

ウ 地域の教育施設や人材等の活用

地域の文化施設である豊田市民文化会館を会場として、地域への啓発活動や地域との連携を深めることを目的としたシンポジウムを開催した。

また、地域の人材等の活用では、隣接する桜花学園大学の准教授と日本赤十字豊田看護大学の教授を研究委員として委嘱し、事業計画の企画や連続研修会の講師として活用することができた。

エ 成果と課題

関係機関との連携に関しては、近隣の愛知県立三好養護学校と連絡を取り、シンポジウム開催に向けての人選などで連携することができた。今後は個別の支援計画や指導計画の策定などで、助言をしていただくことを考えたい。また、発達障害者支援センターやハローワーク等の機関とは直接連絡を取ることができなかった。次年度以降は、該当生徒の進路指導計画の策定などについて、連携を図って取り組む必要がある。

地域の教育施設や人材活用等については十分活用でき有効であった。今後も継続的に活用していきたい。

(4) 関連事業等との連携

先進校の研究実践を学ぶため、平成19・20年度の文部科学省高等学校における発達障害支援モデル事業の指定校である和歌山県立和歌山東高等学校、滋賀県立日野高等学校、京都府立朱雀高等学校、東京学芸大学附属高等学校、兵庫県立姫路別所高等学校、東京都立世田谷泉高等学校を視察し、事例検討会や実践報告会に参加した。

これらの視察により、①気になる生徒の抽出方法としての「気になるカード」の活用、②Ｑ－Ｕ検査の有効性とＱ－Ｕ講習会への参加の意義、③スクールカウンセラーの巡回相談回数を増やすことによる効果、④入学前に中学校を訪問して取り組む中高連携のあり方等を学ぶことができた。その都度、校内委員会で報告し、自校の指導に取り入れてきた。

また、平成20年度の同事業の指定校である群馬県立前橋清陵高等学校が来校し、今後の研究方針等意見交換を行った。

Ⅲ　今後の我が国における発達障害のある生徒の支援の在り方についての提案等

我が国においては、発達障害は、負のイメージをもたれ、どのように支援していくかと

いう視点で論じられる傾向があるが、基本的には発達障害の支援は日常の生活の中で、自然に行うことが大切である。そのためには、発達障害に対する社会全体の理解がすすみ、すべての人に対してお互いがいたわりあえるような優しい社会づくりが求められていくべきであろう。

そのための一助となるよう、発達障害への理解の促進を念頭におき、発達障害のある生徒への支援の在り方の研究を通じて、実践活動を続けていきたい。

Ⅳ　その他特記事項（エピソードを含む）

先進校を視察して、その取組が都道府県によって多様化していることや、学校の組織力や背景によって取組方法が異なることなど、参考になることが多かった。

Ⅴ　モデル校の概要

１　課程・学科・学年別の生徒数、学級数

（平成２０年５月現在）

課程	学科	第１学年		第２学年		第３学年		合計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	6	241	6	211	6	208	18	660
	計	6	241	6	211	6	208	18	660

２　教職員数

（平成２０年５月現在）

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講	実習助手	ALT	事務職員	司書	その他	計
１	１	４１	１	２１	１	０	４	０	８	７８